

(別紙様式2 ②)

議員報告書	
1 議員名	南澤 克彦
2 期 日	令和7年5月15日 ~ 令和7年5月16日
3 研 修 先	明治大学アカデミーコモン (住所：東京都千代田区神田駿河台 1-1)
4 内 容	「変容する社会・地方選挙 ~地方自治のあり方を問う~」 ① 地方自治における政治の復権 名古屋大学名誉教授 後 房雄 ② 日本の統治構造~官僚内閣制は議院内閣制になったのか~ 政策研究大学院教授 飯尾 潤 ③ JICA における地方創生 2.0 地域活性化への挑戦 ~地域との連携による様々な創生事業の実践と活用方法について~ 独立行政法人国際協力機構理事長特別補佐 井倉義伸 ④ 「地方自治のあり方を問う~地方自治の危機~」 金井利之 (東京大学大学院法学政治学研究科教授) ⑤ 「AI時代の双方向コミュニケーション選挙戦略~都知事選の経験から学ぶ~」 安野 貴博 (AIエンジニア・起業家・SF作家) ⑥ ネット選挙に対応する~公職選挙法の改正とその行方~ 安野 修右 (日本大学法学部政治経済学科専任講師) ⑦ 領域を超えない民主主義~地方政治における競争と民意~ 砂原 庸介 (神戸大学大学院法学研究科教授) ⑧ 高齢社会における大災害への対応と課題 浅野 大介 (石川県副知事)
■研修の目的 地方自治における政治の役割について。	
■概 要 講義①「地方自治における政治の復権」と題し、以下を提言 → 政治とは「選挙によって権限を与えられ決定権を持つ存在」 ・ 行政評価の空洞化→事務事業評価の形骸化。首長の掲げる目標に有効か？(そもそも明確な目標を掲げているか？) →職員は既存の事業を踏襲するのが楽。←真の意味で事業の有効性を評価するものにするという視点が大事!! ・ 市民参加の通俗化 →市民公募の委員・審議会 →もし市長の考えと違った答申が出たらどうするのか？ →憲法では市長優先 (選挙で信任を得ている) →実際は職員が誘導し市長方針に結論を導く。←市民参加ごっこ →市長が答申に対し取捨選択する。→ 市長の判断が正しいかどうか選挙でジャッジするという視点を持つ!! ・ 地域自治組織の課題 →公選で選ばれたわけではない地域自治組織(振興会)が何故か予算を自由に使う裁量がある。 ・ マニフェストを行政職員が無視する→私的文書だ！総合計画がある！ →総合計画は前市長が作ったもの → マニフェスト=住民との約束 →行政機関は首長の補助機関 ・ 世界規模で見ると自治体レベルで二元代表制をとっているところは少ない。	

議会を選挙し、多数派が首長を出す(議院内閣制)。or シティマネージャーを雇う。

対話して、なお意見があわないから政党がある。二元代表制では議員の権限は発揮しにくい。自治法改正を！

講義②日本の統治機構(主に国政) →理念に向かって改革をするのではなく、問題が起きて対応している

講義③JICA 国内人口減により、流入した外国人と地域との連携の事業を多く始めている、報告があった。

JICAが行う国内事業について (<https://www.jica.go.jp/domestic/cooperation/index.html>)

講義④2024年改正地方自治法～非平時の補充的指示権(重大事態での特例指示権)～

『重大影響事態』←どこにも定義がない?線引きが抽象的(あいまい)

手続き的には「閣議決定=内閣がそう思った」で完了(根拠薄弱)

→国が自治体に対し、権力的関与ができる法的根拠ができてしまった。自治の力を高める意識を持つべきだ!

講義⑤DXやAI活用により民主主義をupdateできる手法を紹介。Slackの“デジタル民主主義2030”(関心のある方が参加できるオープン開発コミュニティ)の案内があった。

講義⑥日本の選挙運動規制の全体像

→基本設計は「包括的禁止・限定解除(税金投入)方式」基本理念は「私的選挙運動の自由制限原理(ネットは例外)」

→現状ではオールドメディアはボクシング(ルール有り)、SNS・ネットはストリートファイト(ルール無し)

→公職選挙法での対応・誹謗中傷の取締り(235条運用強化)・収益化の停止・第三者支出(187条)規制など

講義⑦自治体の領域と都市圏(生活圈)のズレ・サービスの負担者と受益者が必ずしも一致しない、という課題について、制度的な課題と改革案についての講演。

講義⑧能登震災で明らかになった課題と対応について、副知事から共有いただいた。

■成果または所感等

各登壇者ともに、テーマとなる課題について、歴史的背景から遡り、課題の原因、解決策(現在の取り組み)の提示が行われ、大変わかりやすく勉強になる研修会であった。特に①の事業評価や地域自治組織については、課題が明確になり、今後の決算審査や自治運営組織改革に活かせる視座であった。また⑤については、さっそく開発コミュニティに参加をし、勉強を開始した。すでにAIによる広聴(意見集約とその分析)ができる状況があるので、知見を積み重ね、折に触れて試験的な運用を試みたい。